

度も思ったことか。祖国の状況は全くわからない。共產党発行の日本新聞では、現在日本では失業者が街にあふれ、ボタン大の菓子が一十円で食糧難が続いていると報道していた。それに増し我々の給与は米などを見たことなしで、毎日食べているものは馬と一緒、エン麦、アワ、ヒエ、コウリヤン、そばのカーシヤ（かゆ）が飯盒のふたに一杯だけで、馬鈴薯の入った岩塩の鏡汁だけが唯一の食糧であった。

同胞の鎮魂を念じ

新潟県 生 越 昇

昭和二十年八月十七日陣地出發、翌十八日午後零時、図們的鐵道官舎地内において武装解除受く。二十一日午後、將校と我々伝令數十人の兵士が延吉の師団司令部に收容されるべく図們的の駅に向かった。駅には負傷した將兵が担架で運ばれ、顔など全くわからない状況。傷口には虫がわいて悲惨な姿で、「殺してくれ」と叫

んでいる兵士もいる。我々も、精神状態が正常でないであろうか、ただ黙って見守っているだけである。

当日延吉の師団司令部に收容され、翌二十二日午前司令部を出發、同日延吉の厩舎において山本兵長以下數十人の我々伝令兵がこの日より重砲隊の渡辺隊に属した。九月十二日厩舎を出發。いよいよ日本に帰るということで不安の中にも喜んでいた。だが、これから数年間「ヤポンスキートウキョウダモイ」でだまされ続けられるのである。

ソ満国境ポシエツトを経て八日間の行軍で、九月十九日クラスキー到着。テント生活が始まった。この丘には一万前後の兵士がテント生活で日本に帰る願番待ちのような氣でいた。ある日、列車の中でシャワー浴をさせられた。いよいよ帰国と思って、駄ばらを吹いて喜んで十月四日貨車に乗せられたのが最後、シベリア地獄行きとなる。

走行中の貨車の中は、体からの湿氣の霜で真つ白く冷蔵庫さながらだ。入り口付近などはつららが下がり、寒さのため、貨車の隅の方に病人を寝かせていたがど

うにもならない。排せつ物の処理は、貨車の中で桶を使用。走行中は尻を出して用を足すことも常になり、大して感じなくなった。十月八日、ハバロフスク経由でコムソリスク到着。第四収容所に入所。ここでの作業は、アムール河畔で船の荷揚げ作業、海軍工廠での雑役作業または収容所内の雑役作業などで、皆このころは比較的元気で生活していた。第四収容所から同年十二月四日、渡辺隊長以下約六十人が郊外の第八収容所に転属させられた。この収容所は伐採作業が主体で、三百人ぐらい収容され、丸太を組み上げた飯場が二棟に衛兵所があり、収容所長はモスカリンコーという背の高いロシア人独特の顔つきをした大尉で、副官兼糧秣係がマーキンという中尉で、日本側の大隊長は斉藤中尉、副官は明石少尉。我々の隊長は、渡辺時雄准尉、山梨県の出身の方で立派な隊長であった。

入所当時、電灯がなくシラカバの皮や松脂を燃やして数日間明かりとした。薄暗い灯の下で食事の分配、皆の異様なまなざしを浴びながらお互い大変だった。食事は三食分一度に食っても普通の一食分に満たない

粗末な食べ物、というより餌のような食べ物、大豆をみそ豆状に煮たものを数日食わされた、これには皆が参ってしまった。伐採場には約二時間近く歩かなければならない。皆下を向いてだれ一人物を言う元気などない。ただ黙々と無気力の体を運んでいるだけのこと。伐採場に着くまでに、極寒と過労で仮死状態になって道端に倒れる者もいる。酷のようだが、顔を殴って気をつかせて伐採場に連れて行って、火をたいて暖をとってから、作業についた。毎日こうした繰り返しが続くうちに死者が出始めた。朝起きてみたら、隣の同胞は冷たくなっていた。

収容所内で数回告別式を行った。

伐採作業のノルマ（基準作業量）は、二人一組で、器材はピラ（鋸）一丁、タポール（おの）一丁で、立木を切り倒し、枝をおので払い、倒木を二メートルの長さに切り、切り口の高さ一メートル十センチ、間口六メートル幅に積み上げる。今考えても並みのことでは達成できるようなノルマではない。作業帰りにまきを外套の下に隠し持ってきて、衛兵所で取り上げられ

じだんだ踏んで悔しい思いもした。夜間作業にも狩り出された。零下四十度を超えるような厳冬の中トラックに乗せられ、暗やみの中で高架線上の貨車から石炭の固まりを落下させる作業で、危険と寒さと闘いながら帰って、翌日はまた伐採場でノルマと闘わなくてはならない。

長い冬が過ぎ六月ごろになると、森林にも青い芽を吹く季節になり、目に入る食われるものは片っ端から食った。毒草を間違えて食って入室した者もいる。九月に入るとコルホーズ（集団農場）にカルトーチカ（馬鈴薯）の収穫の作業に交替で行った。農場の人たちの厚意で馬鈴薯を腹いっぱい食べさせてもらえ、抑留中の忘れられない感謝の一こまでもある。二十二年四月上旬のころトラックに乗せられて行って、大きな穴を掘るように言われ、最初は凍土のためラバート（シャベル）などは通用しないので、まきをたいて凍土が溶けたところから鉄棒を使って数日間かけてようやく深さ三メートルの穴を四か所掘り上げた。最初のころは穴の目的がわからなかった。ノルマも案外低かったの

で皆喜んでいたので、だんだんと作業が進むにつれ穴の目的がわかったときには皆「ウワア」と声を上げて愕然としたが、作業は始められた。仮埋葬された遺体を掘り出して大きな穴に埋葬するのであるが、わからないときには二メートルほどの鉄棒を地面に突き刺して、その反応で遺体の有無を確かめ、遺体を掘り上げる。全部の遺体が裸の上解剖されていた。さすが最初のときは肉の入ったスリーブが嫌だった。一つの穴に五十遺体埋葬した。全部で二百遺体ぐらいと思う。遺体を掘っていると、先の収容所で一緒に生活したところのある加藤軍曹の遺体が発見された。皆驚き、人ごとではない。我々も病に倒れたならば軍曹と同じ運命になることと思った。遺体をねんごろに弔い、五十の遺体の一番上に渡辺隊長がモミの木を植えて、一同南無阿弥陀仏を唱え、ご冥福をお祈り申し上げました。

末筆ながら生還を誓い合った同胞の上村甲二君の霊安かれとまぶたの中で描きながら、あのモミの木が四十五年余り地下の同胞を護って、立派な大樹になっていることを祈っています。

原始林伐採の四年間

新潟県 小柳 信人

満州の鉄道第六六八部隊で入隊後間もなくで終戦、敦化で九月下旬、武装解除。

ソ連国境琿春に集合し、マンドリン自動小銃に囲まれて死の行軍で、ウラジオストク港を見降ろすクラスキーの天幕（戦利品）が建ち並ぶ収容所に収容されたのが入ソの第一歩であった。三、四千人くらいはいたと思うところであった。山腹は厳しいシベリアの寒気が襲いくる初冬の幕舎であった。

集合した翌日には移動命令が出た。二千人くらいの混成部隊が編成され、背のうに毛布、雑のう、防寒具という服装での移動、着いたところが丸太組みのコムソモリスク第二収容所であった。

技術者で裸電球を取りつける配線、残りの者は防寒材の運搬やベチカづくり、まずは防寒からと作業を始

めた。それでも朝になると防寒具に薄氷が張るといったぐあい、零下三十度くらいではないかと話し合い、身を寄せ合い材木片をベチカで燃やし続けての交替寝であった。満州当時とは比較にならない寒気が建物の粗末さと加わって一段と身にしみる。二、三日たったであろうか、千人くらいの作業隊に編成され収容所を後にした。

持ち物検査といつては寒い屋外に防寒具姿で並ばされ、所内の目星しい品物が持ち去られていったので、携帯する荷物も、軽くさせられた背のうと雑のうに縛りつけた毛布と飯盒、それに防寒服、防寒帽子という姿である。

カタコトと空の飯盒が歩くたびに寂しい音を立てる。歩哨に囲まれての無言の行軍、隊列を離れる者は遠慮なしに発砲されたので、疲労しても歯を食いしばって隊列に入って歩く、どこへ連行するのだろうか。

五時間くらいがたつたであろうか、夕日が沈みかけ寒気が忍びよるころに山が見えてきた。

馬小屋のような三角屋根の丸太小屋、裸電球がボツ